

思い出を重ね合わせて…



かいなん 海南市長(和歌山県) **神出政巳** じん で ま さ み

郷土の偉人小野田寛郎氏

ふるさとの偉人を1人挙げれば、小野田寛郎元大日本帝国陸軍少尉。私が卒業した内海小学校、海南高等学校(小野田さんは旧制中学)の29歳年長の先輩です。小野田さんの生家と拙宅とは120mの距離。戦後、隣家で小野田さんの次兄や弟さんが電気屋をしていたと、小野田さんより一つ年下の両親から聞きました。

小野田さんは健在であれば100歳。大正11年3月19日海南市名高に生まれ、大東亜戦争に従軍し、最前線のフィリピン・ルバング島に派遣され、終戦を知らされずに



(左から)町江夫人、寛郎氏、筆者、小野田宇賀部(おこべ)神社宮司

30年近く、最後の一兵になるまで戦い抜く。帰国後は単身ブラジルに渡り、未開の荒野を開拓して立派な牧場主となった一方、日本では福島県に「小野田自然塾」を開き、青少年の健全育成に尽力され、平成26年1月16日に91歳で逝去。私は2度、80代の小野田さんにお会いしました。運動量に応じただけのカロリーの高い少量の食がモットー。小柄で階段を2段ずつ駆け上がった姿、80代とは思えぬ足腰の強さを目の当たりにし、唾を唇にためながらの誠実なお話。しかし、時折、眼光鋭くムキになったように話される顔に迫力を感じ、親子のような私に、何を話しても思いが伝わるものではないと考えられておられるのではないかと想像。

私の思い出 (小学校から大学院修士まで)

昭和32年、私が小学校入学直後の梅雨、父が国鉄の夜間仕事で雨に打たれ急性肺炎で倒れ、家の2階で寝ていました。私は父が心配で学校へ行かず家に居たら、和歌山市の紀三井寺から路面電車で通勤していた南校長先生が、停留場そばの私の家まで誘いに来てくれ、一緒に学校に行くようになりました。父は回復すると改装された映画館に連れて行ってくれました。のどかな時代でした。

小学2年生の時には長嶋茂雄さんが巨人

に入団。後楽園球場の開催試合年間入場者数が100万人から200万人に倍増、球場建て替え。草野球の子どもたちはほぼ背番号3を付けていました。3年生の4月10日、皇太子殿下(現上皇陛下)の結婚式があり、父が質屋から白黒テレビを借りてきて、ご近所が集まって挙式パレードを見ました。昭和34年当時の流行歌、低音の魅力フランク永井の歌、ペギー葉山の南国土佐を後にして、民謡の高音三橋美智也の歌、今でも歌えます。父が歌好きで母は三味線を弾けました。隣が酒屋で家ではよく飲み会が開宴されました。中学2年生の東京オリンピック開会式は、それぞれの家庭のカラーテレビで見られる時代になっていました。

大学卒業の直前、昭和48年2月25日東京駅丸の内南口で、7年ぶりに市原市の五井製油所勤務の海南三同級生の女の子に再会しました。後日、上野の東京国立博物館のモナ・リザ展を一緒に鑑賞。あまりの人混みで初めて手をつなぎました。当時は世田谷区成城2丁目の木質アパートの2階に、まさにかぐや姫の「神田川」の世界。昭和50年に修士課程修了し帰郷、程なく結婚。

その頃小野田さんは

陸軍中野学校で情報要員として教育を受けた後、玉碎は絶対に許さん、必ず迎えに行くと横山静雄師団長直々のゲリラ戦を指



除隊命令を受ける寛郎氏（宇賀部神社提供）



座右の銘「不撓不屈」の石碑の前で（宇賀部神社提供）

さんは次のような言葉を残しています。「最大なる味方は『笑う』『笑う門には福来たる』という。私はこの『笑う』ことで助けられた。慰めも、励ましも、弱気になる時、なった時、支えになる。しかし、それ以上に私の味方になってくれたのは、

『笑う』ことだった。『笑う』これだけでなえた心が鼓舞されるのだから。『笑う』それは、神、降臨の光なのかもしれない。私も笑うことが大好きです。家族でならばグランド花月へ足を運び、大笑いしました。笑うと前向きになり、幸せになれます。小野田さんも大切にされた「笑う」と。いつの世も同じですが、先行き不透明で不安が大きい時代だからこそ「笑う」ことが大切です。市民の皆さんを笑顔にするために、微力ですが今後も市政に全力投球します。

導せよとの命令を受け、淡路島の半分くらいの広さで人口約1万3000人のルバング島に渡り、孤立無援の中、保健衛生の知識を持ちつつ野性生活の知恵も磨き、29年3カ月の間に93回討伐隊と遭遇し、最後は1人になっても闘い続けました。情報はかなり把握されていたようですが、軍事用語の不正確な表現の投降呼び掛けやピラなどを二七と錯覚し続けました。昭和34年、母校の小学3年生の私は、国の捜索隊に作文を託したのを覚えています。小学校挙げての作文でしたので、クラス皆で訳の分からぬままに「出て来てください！」と書きました。在京時の私の記憶によれば、昭和49年2月下旬、東京タイムズが、私と歳が近い冒険家鈴木青年と小野田さんとの写真をスッパ抜いたので大騒ぎとなり、小野田さんはやっぱり生きていたんだと思ひ出しました。

「笑う」を大切に

ルバング島30年の体験から小野田

海南市は「全国第2位鈴木木姓発祥の地」です。鈴木青年の名は「紀夫」。紀州和歌山の「紀」を名前に持つ「鈴木」さんが命がけて小野田さんを発見したのは、何か大きな縁があったのかもしれない。帰国してからも大騒動となりました。田中角栄首相からの100万円を靖国神社へ寄付、平和ぼけ、オイルショックなどの時代を経て、能天気さにあきれ、厚生省前で腹を切ると騒いで病院を飛び出し、最後の部下の島田・小塚両氏の故郷へ墓参し、老いた両親の待つ海南市へ戻るも落ち着かず、昭和50年4月上旬、次兄の居るブラジルへと旅立ちました。



ふるさと納税などを原資に復元進む鈴木屋敷と筆者